

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2010年度第4回（通算第10回）研究会

日時：2010年12月26日13時～18時30分

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306）

内容：

- 1) 竹ノ下祐二（ゲストスピーカー、中部学院大学）「霊長類の制度の進化と雑食性」
- 2) 曾我亨（AA研共同研究員、弘前大学）「環境の操作：ヒト属における制度の進化史的基盤」

内容の要旨

- 1) 「霊長類の制度の進化と雑食性」（竹ノ下祐二）

■“食は社会をつくる”のか？

社会生態学の基本的な考え方は動物の社会は食物資源の分布様式によって決定されるというものである。ここでは動物の食物は所与のものとして外部から与えられる。

一方動物は分類群によって程度の差はあれ主体的な“食物選択”をする。消化器系や採食器官の特殊化が少ない雑食動物である霊長類においてその自由度はとりわけ高い。

食物選択の自由度が高ければ、食物の分布様式は外部条件とはならない。そして、もしも個体の食物選択が社会構造や社会関係に制約されていたならば、社会生態学者が言うように“食が社会をつくる”のではなくむしろ“社会が食をつくる”ことになる。

■人間の“食”は制度である

現代のわれわれの食物はまさに制度の産物である。スーパーの食品コーナーに置かれているものが食物だ。それは明文化された法令による規制をうけている。

食に関する法令がなかった時代でも、われわれの“食物”は単に“食べられるもの”でも、また実際に“食べるもの”でもないものとして文化的に決まっていた。そしてそれは逸脱が可能であり、かつ逸脱に対して社会的制裁が与えられるという意味において制度にほかならない。

■長類の食物とは？

ここからヒト以外の霊長類の食物もまた制度であるというのは飛躍しすぎだが、かれらにも“食べられるもの”でも“食べるもの”でもない“食物”があるように思われる。

研究者は調査地の個体群の“食物リスト”を作成する。それはその地域でサルが“食べたもの”のリストだ。社会生態学者はその食物リストを用いて食物分布図を作成し、調査

対象の個体群の社会を説明しようとするだろう。だが、実際にサルや類人猿たちが持っており、日々の遊動を決めるために参照する食物リストはそれとは異なるに違いない。

■社会が食を決めるよすがとなる

さらにサルや類人猿は日々食物リストの中からいくつかの食物を主体的に選択し、ある程度目的が明確なかたちで遊動するが、その食物選択には社会による制約を受ける。以下に3つ例示する。

1) 霊長類の採食集団サイズを食物で説明する際には系統による制約。たとえば大集団をつくりにくいペア型の社会構造をもつギボンの集団サイズは食物密度から予測されるより小さい。

2) ガボン、ムカラバ国立公園のゴリラの遊動様式。かれらは果実、線維性食物、昆虫など多様な植物を利用するが、遊動には、1) 休息、2) 採食、3) 移動、4) 採食移動休息という4つのフェーズが認められる。採食移動休息フェーズでは、集団の構成員は一箇所にまとまっているが活動が同調しない。このフェーズは体サイズの変異が大きなゴリラ集団において構成員の最適採食戦略に生じるずれを調整する機能をもつと考えられる。ゴリラは集団の凝集性を維持することを優先しているのだ。

3) チンパンジーの離合集散。チンパンジーの離合集散は単位集団を維持しつつ変動する食物分布に対応するための適応といわれている。しかし単位集団サイズと採食集団サイズには相関がある。このことは、単位集団が遊動様式や食物選択に影響していることを示唆する。また、採食集団サイズが食物パッチの大きさを説明できてしまうオランウータンと対照的に、チンパンジーの採食集団には食物パッチ密度が影響する。このことはかれらのパーティは食物分布に応じて自在に変えられるのではなく、“出会ったらしばらくは行動を共にしなくてはならない”という社会的制約があることを示唆する。

■社会構造と合意

“社会が食をつくる”のなら、何が社会を決めるのだろうか？一つの解答は、社会は遺伝的に決定された行動アルゴリズムであるというものだ。霊長類の社会構造が系統分類との整合性が高いことはこれを強く示唆する。

一方、クンマーは「サルは葛藤するのだ」という。つまり個体の主体的な選択が許されている。そして社会が維持されるには、個々体の選択に社会の中での“合意”が必要だ。つまり、霊長類の食物選択には合意に基づいて作られた社会構造によって一定の枠が与えられている。これは制度にきわめて近いものと言えよう。

■提案

以上を踏まえ、人間社会における制度の進化的基盤は何かという問いに対し、次のような答えを提案したい。

雑食動物であるわれわれ霊長類は、食物を所与のものとして社会形成の基盤とできない。そこでわれわれは系統的制約と社会的合意によって社会構造を先に決定し、その制約の中で食物を決定する道を選んだ。それにより、日々の食物選択や遊動様式に一定の枠をはめて不確実性を減らすことに成功した。そのかわり、われわれは形態学的には高度な雑食性を保持しつづけることになったため、食性をはじめと何事につけまず社会で合意をとりつけることが不可避となった。これが現代人間社会における制度の進化的基盤である。

2) 「環境の操作：ヒト属における制度の進化史的基盤」(曾我亨)

本発表は2部からなる。第1部ではサルにも適用可能な「制度」の定義を試み、第2部ではその定義の有効性をヒトの行動において確認するために、青森県岩木川流域で行われているウグイ漁を例に検討した。

第1部では、新制度派経済学による制度の定義を参考に、サルとヒトの双方に適用可能な制度概念を考えた。イエーガー(2001:11-12)によると、制度とは「社会が人間同士の相互作用のために設けるルールであり、われわれの行動にパターンを与えることによって、人間同士の相互作用に伴う不確実性を減らす」ものだという。ここでポイントは、(1)人間同士の相互作用のためのルールであることと、(2)社会が設けること、(3)相互作用の不確実性を減らす、の3点である。このイエーガーの定義の前者2点は制度の定義に関する内容であり、3点目は制度の効果にかかわる内容である。そこで、最初の2点について、どのようにすれば良いか考えた。

まず1点目はルールが問題になる。ルールのような「排除された第三項」を操作する能力はヒトに固有のものであり、定義にルールを含めると、サルの諸現象が扱いにくくなってしまう。そこでルールを、相互交渉をするときの条件あるいは環境と言い換えることにした。2点目の「社会が制度を設定する」についても、サルの社会にあるとは考えにくいので、「環境条件の変化」と言い換えることにした。以上をまとめると、「制度」とは、個体または集団の相互作用を秩序づける環境条件または変化する環境条件となる。

イエーガーの定義の3点目「相互作用の不確実性を減らす」は、新制度派経済学にとって、市場を機能させる重要な要素である。相互行為の不確実性が減るということは、安心してある種の行動を行なうことができるようになる。たとえば製品についての情報を開示させるという制度のおかげで、消費者は製品やサービスについての不確実性が減り、一定の安心とともに購入することが可能になる。売買も活発に行われるようになる。制度は相互行為の不確実性を減少させることで、相互行為を活発化させるのである。制度的現象をあつかうときには、その環境条件が相互行為の不確実性を減少させているか、

どのような相互行為を活発化させているかを確認することが重要であると本発表では指摘した。

第2部では、岩木川で行われているウグイ漁における秩序の生成のされ方について論じた。これは、川底に人工の産卵床をつくり、産卵のためにあつまってきたウグイを投網で獲るという漁である。調査対象とした漁場には、約8名の川漁師が属し、一緒に産卵床を作っていた。

産卵床の制作場面を毎分、カメラで撮影し、その写真をもとに分析をおこなった。漁師がどの場所で作業をしているかを分析した結果、8人の漁師には中心的役割を果たす中核者と、その補助をする準中核者、そして材料集めなどに終始する周辺者の3タイプが存在することがわかった。

さて、漁師たちは有機的に連携しながら作業をすすめていたが、中核者から準中核者または周辺者に対する指示や命令はほとんど観察されなかった。指示も命令もないのに共同作業が可能になるのはなぜだろうか。言い換えるならば、この「集団の相互作用を秩序づける環境条件または変化する環境条件」は何であろうか。

この問題を考えるために、行動に埋め込まれたタグという考え方を導入した。たとえば会話という相互行為において、意味のまとまりや場面の境界につけられた目印（これをタグと呼ぶ）は、会話を円滑に進める上で重要な役割を果たしている。同様に産卵床作りの共同作業においても、人びとは行動のまとまりや作業の境界に、さまざまなタグをつけている。そのタグは、各漁師の行動を調整し、共同作業を円滑に進める上で重要なリソースとなっている。

先の分析に用いた写真を利用して、漁師が何をタグとしているかを分析した。その結果、共同作業において中核者が占める場所や、手にする道具、さらには身体の使い方などが、準中核者や周辺の漁師たちにとって重要なタグになっていることがわかってきた。彼らは中核者の動きを見ながら、自分の行動を調節しているのである。一方、中核者は変化する環境をリソースとして、自らの行動を調整していた。

川漁師たちの「集団の相互作用を秩序づける環境条件または変化する環境条件」は、中核者にとっては「変化する自然」であり、準中核者および周辺者にとっては「中核者の身体」である。本発表では、これらをヒト属の制度の進化史的基盤と捉えたい。また人間は内面を自己観察することが可能であるがゆえに、制度を「命令」のような言語的現象として扱いがちであるが、本発表では、制度を内面観察ではなく外部観察によって捉えた。こうした外部観察による制度研究の可能性を強く主張したい。